

進捗状況の概要（1ページ以内）

本事業の中心となる取組は、受験生のもつ学力を総合的・多面的に評価する新たな A0 入試＝新フンボルト入試の設計と実施である。H28 年度新入試を本格導入し、その過程で明らかになった課題を析出したうえで、プレゼミナールおよび二次選考の図書館入試、実験室入試の実施体制・評価方法などをよりブラッシュアップし、問題点の析出と十分な改善策を講じたうえで2年目となる新フンボルト入試（9月23・24日にプレゼミナール、10月14・15日に二次選考）を円滑かつ十全に実施した。合格発表後、合格者全員に上級生をチューターとして配置し、丁寧な入学前教育を実施した。また前年に引き続いて高校への訪問調査や各種取材への丁寧な対応など、本事業の広報活動に尽力した。

校内の実施体制については、前年度の仕組みを踏襲し、学長のリーダーシップのもと、教育担当副学長および入試推進室長が実務面を主導している。事業推進の中核組織は A0 入試専門部会（各学部選出の教員 20 名から構成）であり、入試推進室や入試課と協同しつつこの部会を制度全体の細部にわたる改善・見直しの場として活用し、定期的かつ長時間の審議を経て細部事項の検討・改善（本入試の PDCA サイクル）を実施している。さらに同専門部会の主導のもと、各学部各学科の教員に対して適宜協力要請がなされ、全学的な入試実施体制が構築・整備されている。

取組の成果については、当初申請した計画におおむね沿ったかたちで順調に進捗している。平成 29 年度実施の第 2 回新フンボルト入試では、一次選考のプレゼミナール初日参加者は 382 名、このうち A0 受験者は 192 名を数えた（定員に対する倍率は 9.6 倍）。受験者数は昨年より微減（-6 名）となったが、プレゼミナールの全参加者はむしろ昨年より 1 割ほど増加した。二次選考には 75 名が進み、最終的に 21 名を合格とした。新フンボルト入試は、蓄えた知識の多寡を問うのではなく、その知識の応用力・活用力を問う入試である。一次、二次選考の諸課題をこなしていくなかで受験生はさまざまな力（ポテンシャル）を評価される。この入試形態が「多面的、総合的に評価・判定する大学入学者選抜への転換」する入試として十分に機能しているものと判断する。また 10 倍近い倍率を 2 年にわたって維持できた点（一般的に新入試導入 2 年目は倍率がかなり下がる傾向がある）は、高校生からも「受験するに値する」という評価を一定程度得ている証左であると推量する。

補助期間終了後の継続発展に向けた取組については、既に業務軽減化を図れる部分については省力化等の策を講じつつある。ただし、そもそも新フンボルト入試は多大な労力をかけなければ実施できないしくみであり、単純かつ極端な効率化・業務の軽減（縮小）は制度の根本理念を毀損する恐れがあり、角を矯めて牛を殺すことのないよう慎重な配慮を必要とする。補助期間終了後は、後継となるような外部資金を獲得する等の措置を講ずるとともに、本学自前の財源から必要な予算処置を充当していく必要がある。このことは執行部（学長戦略機構会議）が十分に認識している。また新 A0 入試が軌道に乗り、ポテンシャル豊かな「尖った」学生が多く入学してくれば、教職員の意識を刺激し本事業継続の大きな原動力となりうる。強調しておきたいことは、A0 入試の不合格者が本学の他の入試（推薦入試・一般入試）に再チャレンジし、少なくない数が最終的に本学の門をくぐっている点である（H29 年度は、A0 受験者 192 名中、21 名の A0 合格者を含む計 57 名が入学。なおプレゼミナールのみ参加し、他入試で合格したものは 4 名）。こうした本事業の効果を FD 等で学内に周知していくことで教職員の意識をポジティブに高め、本事業の安定的な継続発展を図る。

学内外への波及効果については、本学の入試改革プランが AP 事業に採択されてから今日まで、多くの取材や訪問調査、あるいは講演依頼を多数受けてきた。基本的に取材や訪問調査等の依頼にはすべて懇切に対応し、機会ある毎に本事業の成果と意義を強調している。また、AP 事業「テーマⅢ」幹事校の企画で、平成 29 年の全国大学入学者選抜研究連絡協議会（入研協、富山開催）のポスターセッションにブースを出展し、多数の質問に丁寧に応答した。また、A0 入試定員の拡大、評価方法の推薦入試等他入試への応用など、2020 入試改革にむけた布石とする予定である。